

資料紹介：「念仏」独湛の『翻刻当麻図記』 その背景と内容

著者	バスキンド ジェームズ
雑誌名	九州工業大学大学院情報工学研究院紀要．人間科学篇
巻	27
ページ	79-110
発行年	2014-03-20
その他のタイトル	Nenbutsu Dokutan ' s Honkoku Taima zuki : Context and Content
URL	http://hdl.handle.net/10228/5233

資料紹介：「念仏」独湛の『翻刻当麻図記』

— その背景と内容 —

ジェームズ・バスキン

黄檗禅僧の独湛性瑩 — 日本の浄土信仰へ

独湛性瑩（一六二八～一七〇六）は、福建省生まれで、二七歳の時に日本黄檗宗の開祖である隠元隆琦（一五九二～一六七三）とともに日本に渡った。隠元に付法され、黄檗宗第四歴代住持にまで昇ったが、独湛をめぐるのもっとも知られているのは、「念仏独湛」という呼称に見られるように、禅僧でありながらの浄土行の修行者でもあることなのだ。中国の五代の永明延寿（九〇四～九七五）の出現以来、禅浄兼修が有力になりつつあり、元代の中峰明本（一二六三～一三二三）の時代までにすっかり中国仏教の一部として定着されるようになり、明本の言葉を引用すれば「禅は浄土の禅、浄土は禅の浄土なり」と言えるほどであった。¹ 独湛の念仏観の形成にもっとも影響を及ぼした人物といえば、明末の雲棲株宏（一五三五～一六一五）であろう。雲棲は禅の普及に大いに努めたが、同時に念仏を信じ、念仏行が彼の思想や著作の重大なる位置を占める。雲棲は蓮宗第八祖であり、慧遠（三三四～四一六）や善導（六一三～六八一）の浄土教を伝承されてきた。² それだけではなく、明末に特に流行されるようになってきた禅浄一致論大いに標榜し、日本にも名声を博したほどであった。雲棲の念仏への傾倒ぶりは近世禅の第一人者である白隠慧鶴（一六八六

¹ 長谷川匡俊「近世念仏者と外来思想 — 黄檗宗の念仏者独湛をめぐる」（『季刊日本思想史』第二十二号）四十八頁。

² 荒木見悟『雲棲株宏の研究』、五頁、大蔵出版、一九八五年。

～一七六九）の顰蹙を買い、白隠の仮名法語である『遠羅天釜』に取り上げられ、批判の対象ともなった。独湛の母国である中国なら、いわゆる「禪」の修行僧が浄土変相図を信仰し、その縁起文を書くのも、何の違和感をもたらないだろう。しかし、独湛は宗派意識のより堅い日本で当時でも今日でも注目を集め、禅宗・浄土宗のどっちつかずの僧侶の扱いとされてきた。

当麻曼荼羅と独湛

当麻曼荼羅は、智光曼荼羅と清海曼荼羅と並んで日本の浄土三曼荼羅と呼ばれている。³ 本来は、極楽浄土の情景を描写する美術的媒体は「浄土変相」といわれたが、日本に伝流され、日本密教の影響で、諸経典の変相（極楽や地獄を表現するありさま）においても「曼荼羅」という語が当て嵌められてきた。浄土変相の由来は、唐時代に遡り、則天武后（六二四―七〇五）に、善導が四百幅の浄土変を作成させられたと伝えられているが、今日に至っては現存しているものがない。ところが、敦煌の莫高窟には浄土変相の壁画が数多く残されており、唐代の浄土信仰の美術的表象や表現を伺うことができる。⁴ 阿弥陀仏の西方極楽浄土を題材とする浄土変相は、大半を占め、『観無量寿経』に説かれるごとく、韋提希が釈尊に説法された極楽浄土を観想する十三法が表象されていることが多いため、浄土信仰の対象として今日まで崇められてきた。八世紀成立の諸変相が主として堂舎莊嚴や先祖の追善供養のために造られてきたが、それに対して、上記の浄土三曼荼羅が専ら観想念仏の対象として伝えられたところに特徴を見出せる。⁵

³ 日本浄土曼荼羅についての詳しい学術研究書として、元興寺文化財研究所編『日本浄土曼荼羅の研究』中央公論美術出版、一九八七年。

⁴ 敦煌の浄土変相研究のため、勝木言一郎著『初唐・盛唐期の敦煌における阿弥陀浄土図の研究』創土社、二〇〇六年をご参考。

⁵ 『日本浄土曼荼羅の研究』十四頁。

当麻曼荼羅ともっとも連想強いのは、当麻曼荼羅の縁起に出てくる中将姫のことだろう。縁起の中で、奈良時代天平ころ（七二九）、横佩大臣の娘が極楽浄土をあこがれたため、蓮の糸でそのありさまを織ったという本来の縁起だった。もう一つのバージョンは、平宝字七年（七六三）に当麻寺で中将姫が出家し、法如となり、そこで阿弥陀仏への信仰が非常に強いため、生身の阿弥陀に拝みたいという願いをした。そこで、ある尼が現れ、百駄の蓮茎を集めれば、かならず阿弥陀に逢えると告げた。蓮の茎を集められたら、その阿弥陀の化身が蓮の茎を折り、糸を抜いた後、井戸を掘り、その水で洗ったら、五色の糸となった。その時に、もう一人の尼が現れ、その糸で当麻曼荼羅を織り成したという構造になっている。この曼荼羅や縁起を伝えられた記録は平安時代ではなく、もっとも早いものが建久二年（一一九一）僧実叡記『建久御巡礼記』である。他に収録されている文献を年代順に挙げれば、貞応二年（一二二三）證空撰『当麻曼荼羅注』、寛喜二年（一二三〇）僧慶政書写『九条家本諸本縁起集』、文暦二年（一二三五）『護国寺本諸寺縁起集』所収極楽変相曼荼羅事、嘉禎三年（一二三七）『上宮聖徳太子拾遺記』所収当麻寺縁起、建長五年（一二五三）『仁和寺本当麻寺縁起』、建長六年（一二五四）橘成季撰『古今著聞集』、正嘉三年（一二五九）僧住信撰『私聚百因縁集』、弘長二年（一二六二）僧証恵記『禅林寺本当麻曼荼羅縁起』、文永七年（一二七〇）ごろ撰『続教訓抄』、元享二年（一三二二）釈師練述『元享釈書』などがある。松島と河原両氏が指摘するように、十三世紀後半に鎌倉光明寺の当麻曼荼羅絵巻が現れ、身分の高い女性の発願による蓮糸曼荼羅の造立の伝説がほぼ完成の形に至る。⁶

時代が下がるに連れて、当麻曼荼羅縁起は展開し、当時の風潮とともに脚色が加えられてきた。特に影響が強かったのは、室町末期から江戸前期にかけて

⁶ 松島健・河原由雄共著『当麻寺』日本の古寺美術11 保育社、一九八八年、一五二―一五三頁を参考。

の絵入り古写本であり、いわゆる奈良絵本や御伽草子とも呼ばれる文芸的媒体である。この類のジャンルは、室町物語という範疇にも入り、文学界・文化史に中心的位置を占めていた。もっとも顕著な粉飾といえば、室町期に流行っていた継子いじめというテーマであり、当麻曼荼羅に付着してきたら、中将姫伝説が生まれてきた。無論、落窪物語に見られるように平安時代の時でも継子いじめが文芸のテーマとして存在していたが、現存するもののほとんどが鎌倉以降に改作された室町物語である。⁷ 独湛が当麻曼荼羅を見た時まで、曼荼羅自体とその縁起における中将姫の位置が確固たるものとなり、継子いじめのところが欠かせない要素になっていた。本来は、多くの室町物語や説話と同じく、中将姫伝説が絵説式に唱導するものとして使用されたため、因果応報、勧善懲悪を想わせることにより仏道へと勧めたのである。

独湛と当麻曼荼羅における研究史

独湛性瑩と当麻曼荼羅との関係についての先行研究としては、大賀一郎氏や松永知海の研究論文により、以前かつて未開拓の研究領域に足を踏み入れることとなった。大賀氏の先駆的な論文は「黄檗四代念仏禅師独湛和尚に就いて」で、独湛と当麻曼荼羅との関係を明るみに出されたものである。論文の始めに独湛をめぐるいくつかの点を提示し、その中、(一) 独湛が当麻曼荼羅の図とその由来を母国の中国に紹介したこと、(二) 晩年、二度に亘り当麻寺に参詣したこと、そして(三) 独湛が当麻曼荼羅図を描いたということがある。⁸ 大賀が独湛の浄土信仰の有り様を検討しながら、独湛の当麻曼荼羅縁起図説をめぐる諸文献の背景について情報を提供する。このテーマを封切る論文として重要な役割を果たし、黄檗宗と日本浄土宗の交流史に大きく貢献することができたが、

⁷ 『日本浄土曼荼羅の研究』二九一頁。

⁸ 大賀一郎「黄檗四代念仏禅師独湛和尚について」『念仏と禅』法蔵館・一九四二、三一頁

主に問題提起にとどまる。松永氏の代表的な論文としては、「黄檗四代独湛和尚攷——当麻曼荼羅をめぐる浄土宗僧侶との関連において——」、「当麻曼荼羅攷」や「黄檗四代独湛和尚攷——知海曼荼羅覚え書き——」のようなものがある。⁹ 松永の「黄檗四代独湛和尚攷——当麻曼荼羅をめぐる浄土宗僧侶との関連において——」は、相当の力作で、数多くの関連文献を検討しながら、日本側の独湛と当麻曼荼羅、浄土宗との関係を明らかにすることが多々ある。特に重点を置かれているのは、独湛が浄土宗の学僧である義山（一六四八～一七一七）と忍澈（一六四五～一七一）との交流であり、その関係の経緯を検討することによって、独湛の浄土信仰形態の輪郭がより明確に描かれるようになる。大賀氏の論文は当時の草分け研究で、独湛と当麻曼荼羅との関係だけに焦点を定めず、広く独湛の念仏信仰取り上げる中、独湛の生涯、浄土教信仰、『安心法語』¹⁰との関係、観修作福念仏図などに触れる。当麻曼荼羅縁起図説の刊行や曼荼羅図の印行の話の中で、当麻曼荼羅縁起図説の刊本の五種を紹介する点で大変有意義な研究論文である。その五種の刊行本は、一）義山本、元禄十三年、二）支那本、元禄十五年（康熙四十一年）三）寛政本、寛政十一年刊行、四）文化本、文化六年、そして、五）明治本、明治十九年出版ということであり、外題が異なっているが、内題や内容の本分全体が同一であると大賀氏が指摘する。¹¹ 図説の内容と刊行について大賀氏の論述が続く。元禄十三年に「当麻寺化仏織

⁹ 松永氏の「黄檗四代独湛和尚攷——当麻曼荼羅をめぐる浄土宗僧侶との関連において——」と「当麻曼荼羅攷」、「黄檗四代独湛和尚攷——知海曼荼羅覚え書き——」の論文は、『坪井俊映博士頌寿記念 仏教文化論攷』坪井俊映博士頌寿記念会刊行、一九八四、『仏教大学大学院研究紀要』十一号、一九八三、『黄檗文華』七八号、一九八四のそれぞれの出典である。大賀氏の論文の方は、『念仏と禅』法蔵館、一九四二に収録。

¹⁰ この書物の正式名は『黄檗在家安心法語』であり、内容としては、黄檗における念仏行、禅浄一致思想を述べるものである。独湛の作という説は、明らかに誤ったもので、初期黄檗まで遡るものと見せるためだろう。実情は、明治のもので、黄檗宗の三十八代住持の林道永の著作であった。

¹¹ 大賀一郎、「黄檗四代念仏禅師独湛和尚に就いて」四八頁。

「造藕系西方聖境図説」が刊行され、その書の内題は「日本大和州当麻寺化人織造藕系西方境縁起説」と言われ、美濃版大、図版六枚入であり、最初に支那杭州の慈雲続法の引文があり、本文六枚・後記二枚共に独湛と悦峰によるもので、つまり独湛とその弟子の悦峰道章（一六五五―一七三四）の合作であると指示する。¹² 悦峰道章は浙江省の人で、康熙二四年（一六八五）に興福寺からの招聘に応じ、翌年の五月に長崎に到来した。元禄七年（一六九四）に独湛の法を嗣いだ。万福寺の住持まで登り、荻生徂徠や柳沢吉保のような江戸の豪傑と筆談した。

『翻刻当麻図記』における背景や研究史は上述の通りとなっている。次は、本文献の書誌情報と全体の内容を下記のように列挙しておく。

『翻刻当麻図記』書誌情報と内容

書誌情報：

【所蔵】九州大学文系合同図書室・相見（あいみ）文庫／W／189（貴重書）：
ハーバード大学燕京図書館（後の詳細を調べよ）

【外題】（題箋）翻刻当麻圖記

【内題】ナシ

【尾題】ナシ

【年代】江戸時代後期、文化六（一八〇九）年 【数量】1冊、完本、整版本

【料紙】楮紙 【法量】縦23.2×16.4糎 【界線】 【丁数】一八丁

【表紙】元表紙、黄色

【印記】（表紙）春情城□（不明）（朱・方印）

¹² 大賀一郎、「黄檗四代念仏禪師独湛和尚に就いて」四八頁。

(跋) □ (? 華) 頂山 (朱・円印)、出経堂 □ (不明) (朱・方印)

【内容】

1 オ～2 オ：序

3 オ～(独自の丁付)：図

3 オ 長谷祈嗣図

3 ウ／4 オ 将姫帰命図／僧授経図(見開きで一図)

4 ウ／5 オ 観女紡織図／弥尼同事図

5 ウ／6 オ 懸掛指示図／三聖九品図

6 ウ／7 オ 法尼修證図／善神擁護図

7 ウ／8 オ 臨終生方図／仏来接印図

8 ウ 空白

9 オ～(以下、丁付別)：「引」(末尾に) 康熙壬午年

浙杭東林慈雲灌頂行者統法槃諍

10 オ～・：「縁起説」

18 オ・ウ：跋

次の通り、『翻刻当麻図記』の原文、書き下し、現代語訳の三段形式で全体の中身を提示されている。

翻刻当麻図記序 1 オ～2 ウ

此土古来、所感西方之変相三。一則、天平中元 興寺僧智光掌中所現。一則、宝字中当麻寺尼元興寺の僧智光掌中に現ずる所なり。一つ則ち、宝字の中に当麻寺尼法如誓修所感。一則、正暦中超勝寺僧清海所感。客詳載于古史並別伝。而

至法如所感則因縁顯白聖瑞、最奇者也。至今千有余年、聖境靈跡儼然、猶存庸陋・卑鄙、亦口其事小説・稗史或飾其文繁言・浮詞伝流雜猥、可以恨也。遅、於黄檗独湛禪師至寺見図即隋喜、著述縁起云、其

文蘭且明観賛殆書、贈諸故国以付剗剗曰此神異事従有仏法、已来所未有也。於摩湛禪師見地峭峻坐断仏頂、而毘賛浄土之事相如此。自非夫宗説俱通。胸中無尋、贗安得其至此乎哉。

先是、華頂義山師翻刻清本行于世。無何佚亡世知之者。鮮矣頃、法弟実祐得清本、于道交梁山氏将再奉公于世。謁余為序。余以不文辞不許、聊述顛末顯于其、眷以表隋喜也。夫此挙、一就伝流醇実。読者皆有植浄因者、其功德不可思議者也。

文化六年己巳孟冬月

尾張見住八事山興正寺比丘実巖序

翻刻当麻図記序 1 オ～2 ウ 書下し

此ノ土古来、西方ノ変相ヲ感ズル所、三ナリ。一ツ則ち、天平ノ中ニ元興寺ノ僧智光掌中ニ現ズル所ナリ。一ツ則ち、宝字ノ中ニ当麻寺尼法如誓修シ感ズル所ナリ。一ツ則ち、正暦ノ中ニ超勝寺ノ僧清海感ズル所ナリ。各詳ラカニ古史ニ載セ、併セテ別ニ伝フルトコロナリ。而ルニ法如ニ至リ感ズル所則チ縁ニ因ッテ聖瑞ヲ顯白スルコト、最モ奇ナル者也。今ニ至ルマデ千有余年、聖境・靈跡ハ儼然タルニ、猶ホ庸陋・卑鄙ニ存シ、亦タ其ノ事小説・稗史ニ口ニシ或ルイハ其ノ文繁言・浮詞ヲ飾リ伝流シテ雜猥ナルコト、以テ恨ムベキ也。遅チ、黄檗独湛禪師ニ於テ寺ニ到リ図ヲ見テ即チ随喜シ、縁起ヲ著述シテ云ク、其ノ丈、簡且ツ明ニシテ、賛ヲ勸メ、殆尽シ諸ノ故国に贈リ、剗剗ニ付シテ曰ク、

「神異ノ事仏法有リテ従、已来未ダ有ラザル所也。独湛禪師ニ於テ見地峭峻ニシテ仏頂ニ坐断シ而シテ浄土ヲ毘賛スル事〔浄土毘賛の事〕、相此ノ如シ。夫宗説

ニ非ザル自ハ俱ニ通ズルモノナリ。胸中尋ヌルコト無ク、膺安ク其ヲ得テ此ニ至ル乎哉。先ニ是レ、華頂ノ義山師翻刻・清本シ世ニ行ハル。何モ無ク佚亡シ、世ニ之ヲ知ル者。鮮矣頃（シバラクシテ）、法弟ノ実裕清本ヲ得テ、道ニ交ハル梁山氏将ニ再ビ世ニ梓公セントス。

余謁エテ序ヲ為サントス。余文辞ナラザルヲ以テ許シタマハズ、聊ガ顛末ヲ述シテ其ニ題シ看ルニ以テ随喜ヲ表ス（以テ随喜ヲ表スヲ看（ココロミル）ル也。許サズ、聊カ顛末ヲ顯カニ述べ、ソノ眷（ナサけ）ヲ以テ随喜ヲ表スナリ。一ニ伝流ノ醇実ナルニ就ク。読ム者ハ皆淨因ヲ植ルコト有ル者、其ノ功德不可思議ナル者也。

翻刻当麻図記序 1 オ～2 ウ 現代語訳

この国には、古来、西方（極楽浄土）の変相図を感じさせた出来事が三つある。一つは、天平時代に、元興寺の僧、智光の掌のなかに現れた図（夢の中で阿弥陀の手の中に極楽浄土が現れた所のもの）である。もう一つは、宝字中に当麻寺の尼、法如が誓いにより、（浄土の莊嚴を）感じたところの変相図である。もう一つは、正暦年間中の超勝寺の僧、清海が感応して作った図である。各々の変相の説明は古史に詳細に載せ、また別に伝えてもいる。しかし、法如の感ずる変相図は、因縁により、その聖なる瑞祥を明らかに示して、最も奇特なものである。今に至るまで千年以上経ち、その神聖な境地・霊力のある奇跡は厳然たるものであるにも関わらず、未だ俗間にあり、あるいはつまらない読み物や歴史物語に載せられ、あるいはその文芸自体が冗長で虚飾に満ちたまま伝わり、混乱した形を取ってきたことは、誠に恨むべきことである。そこに、黄檗宗独湛性瑩がこの寺に来、変相図を見て、たちまちに大いに喜び、その縁起を著述して云く：その長老（独湛）は簡潔かつ明らかにし、賛をすすめ、殆ど尽くしたほどであった。故国の諸々のところに送り、そこで、その木版に付けて言っ

た：このような不思議なできごとは、仏法が興ってからこのかた未だかつてなかったことである。独湛禅師は、見識が高く、仏法を極めた人であったが、浄土を称讃すること、このような次第であった。浄土は禅師自らの禅宗の宗旨でないものの、共に通じあうものなのである。胸中に疑うところなく、安らかにその奇瑞に感じ入り、この賛美に至ったのであろう。かつて、華頂山の義山師がこのテキストを翻刻、清本（正本）して、世に普及した。この本は間もなく散逸し、知る者もいなくなった。このたび新しく、義山の弟子の実祐が正本を得、親交の深い梁山氏が再び刊行しようとしている。私はこれに接して序を書こうと思ったが、文辞が拙いためにそれも叶わず、わずかにその顛末を述べ、題をして私の喜びを表す次第である。この行いは、ひとえに伝流のあつく実なることによる。読む者は皆、浄土往生への因（念仏）を興すもの、その功德は計り知れないものである。

引 9 オ～10ウ 原文

如来教道叵測。菩薩度生無方。然仏度有縁。心淳見仏。今於悦峰禅師驗之矣。悦峰諱道章。幼歳習講浙杭。壮年遊化長崎。徧探名勝。上洛遇湛老人。針芥相投。遂伝宗焉。因諸当麻寺頂礼藕絲西方境。夫当麻寺。亦是役小角行者家舎。当麻王子。命而為寺。寺因得名。役公手植桜樹于寺傍記曰。仏法興桜樹榮。是以日本仏法興來自欽明帝至今。一千一百五十余年矣。王臣之帰敬。名山之広布。名僧之衆多。詳載于国史伝記。並积書中。茲不煩引。後有撰家藤公一女。来此修道。感得弥陀鑿井染糸。観音織出西方聖境。如是始末。彼記悉矣。悦公摸写図像乃書湛老人所著縁起説。遥囑楮居士山玉付刻伝流。以広雲棲浄業法門。真盛事也。不我遐棄徵言於予。予惟悦公身居異国留念故郷。以此大希有事。普使故国知聞。真無尽法喜。蓮沼一渡航也。

康熙壬午年

浙杭東林慈雲灌頂行者統法槃譚

引 9 オ～10ウ 書下し

如来ノ教道ハ測リガタク、菩薩ノ度生ハ無方ナリ。然ルニ仏ハ有縁ヲ度ス。心淳（キヨ）ケレバ仏ヲ見ル。今、悦峰禪師ニ於テ之ヲ驗ス。悦峰諱ハ道章ナリ。幼歳ニシテ浙杭ニ習講シ、壮年ニ長崎ニ遊化ス。徧ク名勝ヲ探り上洛シテ湛老人ニ遇ヒ、針芥相ヒ投シテ遂ニ宗ヲ伝フ。因テ当麻寺ニ諸テ藕絲西方境ヲ頂礼ス。夫レ当麻寺ハ亦是レ役小角行者ノ家舎ナリ。当麻王子命シテ寺ト為ス。寺因テ名ツクルコトヲ得。役公手ツカラ桜樹ヲ寺ノ傍ニ植ゑ、記シテ曰ク「仏法興ラバ桜樹栄ヘン」ト。是ヲ以テ日本仏法興来リテヨリ欽明帝自今ニ至リテ一千一王臣ノ帰敬、名山ノ広布、名僧ノ衆多ナルコトハ詳ラカニ国史伝記並ビニ釈書ノ中ニ載ス。茲ニ煩引セズ。後ニ撰家藤公ノ一女有リ。此ニ来テ修道シテ弥陀井ヲ鑿（ほり）テ糸ヲ染メ観音、西方聖境ヲ織出スルコトヲ感得ス。是ノ如ク始末ス。彼ノ記ニ悉（ツク）セリ。悦公図像ヲ摸写シ、乃チ湛老人ノ著ス所ノ縁起説ヲ書シテ、遥カニ褚居士山玉ニ囑シテ付刻伝流シテ、以テ雲棲淨業法門ヲ広ス。真ノ盛事ナリ。我ヲ遐棄セズ。言ヲ予ニ徴（アラワ）ス。予惟フニ悦公身異国ニ居シテ念ヲ故郷ニ留メ、此ノ大希有ノ事ヲ以テ、普ク故国ヲシテ知聞セシム。真ニ無尽ノ法喜。蓮沼ノ一渡航ナリ。

康熙壬午年

浙杭東林慈雲灌頂行者統法槃譚

引 9 オ～10ウ 現代語訳

如来の教え導く道は測りがたく、菩薩の救済は無限である。しかるに、仏は有縁の人々を救済する。心が淳（きよ）ければ仏を見る。今、悦峰禪師がこれを験しているのである。悦峰、諱は道章という。幼いころ浙杭において習講し、

壮年になって長崎に来、住んできた。広く名勝を探しながら上洛し、独湛性瑩老人に遭い、意気投合して宗旨を伝えた。そのため、当麻寺へ詣で、藕糸西方境に礼拝した。その当麻寺というのは、本来、役小角行者の棲家であった。当麻王子が命じて寺とした。寺はそのために（当麻寺と）名づけられた。役公自ら桜の木を寺の傍らに植え、次の通り記した「仏法が興れば、桜の木も栄えよう」と。仏法が興隆した欽明天皇の時代から現在に至るまで、一千百五十余年となる。

（当麻寺については）王臣の帰敬や、名山が広く知られていること、名僧が多かったことは、国史や伝記並びに釈書などが詳細に載せているので、ここに改めて引かない。後年に、摂関家の藤原家の一人の娘があり、この寺に来て、仏道の修行にはげみ、阿弥陀を感得して、井をほり糸を染め、観音、西方浄土を織出すということを成した。そのような始終は、彼の伝記に悉く記してある。悦峰師はその図像を摸写し、その後、独湛老人が書き著した縁起説を添えて、遠方の楮居士に頼み、山玉にて付刻して伝え、雲棲株宏の浄業法門に広めようとした。真に立派な事業である。私を見放すことなく、私に奥深い言葉を残された。私の考えるに、悦峰師は、身体こそ異国に住むも思いは故郷に留めており、このような大いなる奇瑞を広く故国に知らせたのだろう。真に無限の法喜である。蓮沼の一渡船であろう。

日本大和州当麻寺化人織造藕糸西方境縁起説 10オ～17オ

10オ～10ウ 原文

日本大和州当麻寺化人織造藕糸西方境縁起説黄檗四代性瑩独湛選
東明嗣法門人道章悦峰録此曼那羅。乃化人用蓮莖取糸之所織也。幅方一丈五尺。
下以一夜生無節竹為軸。用子丑寅三時造就。至今已歷九百三十余年之久矣。丁

丑三月念六日。瑩独湛到寺随喜。見此図依正二報。非仏菩薩神力所成。娑婆衆生何人能作。

10オ～10ウ 書下し

日本大和州当麻寺化人織造藕糸西方境縁起説黄檗四代性瑩独湛選東明嗣法門人道章悦峰録此曼那羅。乃化人用蓮茎取糸之所織也。幅方此ノ曼荼羅ハ乃チ化人蓮茎ヲ用テ糸ヲ取りコレヲ織ル所ナリ。幅方ハ一丈五尺ナリ。下モ一夜ニ生スル節無キ竹ヲ以テ軸ト為ス。子丑寅ノ三時ヲ用テ造り就セリ。今ニ至テ已ニ九百三十余年ノ久シキヲ歴タリ。丁丑三月念ジテ六日ニ瑩独湛寺ニ至テ随喜シテコノ図ノ依正二報ヲ見ル。仏菩薩神力ノ成ス所ニ非ズンバ。娑婆ノ衆生、何人カ能ク作サン

10オ～10ウ 現代語訳

日本大和州当麻寺化人織造藕糸西方境縁起説

黄檗四代性瑩独湛選

東明嗣法門人道章悦峰録

この曼荼羅は化人〔佛、菩薩が仮に形を変えて人となったもの〕が蓮の茎を使って糸を作り、織ったものである。四方四角は一丈五尺ある。曼荼羅の下部も、一夜で成長する節のない竹を使って軸としている。子丑寅（〇時から午前6時まで）の三刻の間に作り成したものである。今まで已に九百三十年余りの長い時を経ている。丁丑（1697）の三月に念じて六日に、独湛性瑩が当麻寺に着いて、非常に喜んで、この図の依正二報（仏国土と仏身）を見た。仏菩薩の神通力の仕業ではなければ、普通の世の人の誰がこのようなものが作れるのだろうか。

11ウ 原文

他不具説。先見蓮池中二舟。用蓮花先合成。舟中奇異。真思想所不到也。此図初禁不許模倣。開來已五百年。尽士数人。費二年之工。仏自造頃刻而就。真不可思議事。東方衆生。可知福厚。西土俗筆。大不相侔。凡事有始則有終。此図輾轉流布。直待世界壞時。方隨毀滅。欲知其始自此那四十六代 孝謙天皇御宇。実宇七年。当支那唐代宗広徳元年也。時右僕射豊成藤公祈子于長谷寺生一女。名為中將。三歳失母。

11オ 原文

至七歳日読称讃浄土經六卷。至十三歳。継母憎嫉。誣以非礼異事。藤公初不甚信。浸潤之譜既久。藤公遂信。怒云急乘此女。命武人監至荒山而密殺之。武士至山云。此乃藤公命也。娘子有非礼事。命吾密殺。幸勿恨吾。擬下刃。中將荅云。汝奉吾父命而殺我。安可恨汝。吾平日読經念佛。薦度亡母。無他罪惡。継母憎嫉。年來雖知其意。毫無嫌恨。此因果到来。当怡然自受。何可恨人。但汝殺後。可将吾首裹以我身上一重衣。

11ウ 書下し

他具サニ説カズ。先、蓮池中ノ二舟ヲ見ルニ蓮花ノ片ヲ用、合成セリ。船中ノ奇異、真ニ思想ノ到ラザル所ナリ。此ノ図、初メ禁シテ模倣ヲ許サズ。開來已ニ五百年、画士数人、二年ノエヲ費ヤス。仏自ラ造テ頃刻ニシテ就（ナ）ル。真ニ不可思議ノ事ナリ。東方ノ衆生、福厚キヲ知ル可シ。西土ノ俗筆大ニ相ヒ侔レズ。凡ソ事始メ有レバ則チ終ワリアリ。此ノ図輾轉流布シテ直ニ世界壞スル時ヲ待テ、方ニ随テ毀滅セン。ソノ始メヲ知ラント欲セバ此邦四十六代 孝謙天皇御宇宝字七年ヨリ始マル。支那唐ノ代宗広徳元年ニ当タレリ。時ノ右僕射ノ豊成藤公子ヲ長谷寺ニ祈テ一女ヲ生ス。名ツケテ中將ト為ス。三歳ニシテ

母ヲ失フ。

11オ 書下し

七歳ニ至テ日ニ称讃浄土経六卷ヲ読ス。十三歳ニ至テ継母憎嫉シテ誣（ソシ）ルニ非礼異事ヲ以テス。藤公初メ甚ダ信セズ。浸潤之譜既ニ久シクシテ藤公遂ニ信ジ、怒テ云ク、急ニ此ノ女ヲ乗テント。武人ニ命シテ監（イマシメ）ニ荒山ニ至テ密カニ之ヲ殺サシム。武士山ニ至テ云ク、此レ乃チ藤公ノ命ナリ。娘子非礼ノ事アリ、吾ニ命シテ密カニ殺サシム。幸（ナニトゾ）吾ヲ恨ムコト勿レト。刃ヲ下サント擬ス。中将答云ク、汝、吾が父ノ命ヲ奉シテ我ヲ殺ス。安ゾ汝ヲ恨ム可シ。吾平日読経念仏シテ亡母ヲ薦度ス。他ノ罪惡無シ。継母ノ憎嫉年来ソノ意ヲ知ルト雖モ毫モ嫌恨スルコト無シ。此レ因果到来ス。当ニ怡然トシテ自ラ受クベシ。何ゾ人ヲ恨ム可シ。但汝殺シテ後吾首ヲ將テ裹ムニ我身上ノ一重ノ衣ヲ以テシ父ノ命ニ復ス可シ。

11ウ 現代語訳

他に詳細を説いたものはない／他は詳しくは説かない。先、蓮の池の中の二舟を見てみると、蓮の花卉を用い合せて成したものである。この船の中の不思議なこと、真に想像を絶するところである。この図は、初めのころ禁じられて模倣（模写）が許されなかった。曼荼羅は開帳されて五百年してから、画士数人が（模倣の）工に二年を費やした。仏自らはわずかな時間で完成させた。真に不思議なことである。東方の衆生は、福が厚いことを知らなければならない。西土の俗筆も、全く相い侔（そろ）はないのである。そもそも、何事も始まりがあればすなわち終わりがある。此の図も、輾転としながら流布し、まさに世界が滅するときに随って壊れ毀れるのであろう。その初め（起り）を知ろうとすれば、この国の四十六代の孝謙天皇の時代、宝字七年より始まったのである。

唐の代宗広徳元年（762）に当たる。時の右大臣、藤原豊成公は、子供が授かるよう長谷寺に祈願して、一女を生した。中將と名付けた。（中將姫は）三歳で母親を失った。

11オ 現代語訳

七歳になると、日々（日に）称讃浄土經六巻を読んでいた。十三歳になると、継母は憎み嫉んで、非礼異事をもって謗った。豊成公は最初全く信じなかった。水がしみこむように、だんだんと深く信じさせるように謗ることが長い間続いて、豊成公は結局信じ、激怒して言った。「急いでこの娘を捨てよう。」武士に命じて捕え、荒山に連れて行って、密かにこの娘を殺させることにした。武士は山に着いて言った。「これはただ豊成公の命令なのです。あなたに非礼があって、私に密かに殺させるのです。どうか私を恨まないでください。」刃を下ろそうとすると中將姫が答えた。「あなたは、私の父の命令を受けて私を殺すのです、どうしてあなたを恨みましょう。私は普段、読經念仏して亡き母を弔い、彼岸まで渡すようにしてきました。他の罪惡はありません。継母の憎み嫉みは、ここ数年その意図をわかっていましたが、少しも恨み嫌うことはありません。これは因果の働きです。まさに喜ばしく受けるべきことです。どうして人を恨みましょう。ただ、あなたは私を殺したあと。私の首を一番上の衣で包み、帰って父に報告なさい。」と。

12ウ 原文

以復父命。中一衣謝汝行刃。下一衣纏包吾屍擲于深谷。是所頼也。然吾毎日読經六卷。今日未読。且待須臾。読罷行刃可也。遂命水包于草葉浄手読經。武士按刃傍立。中將心口散乱。眼淚不止。纔二三卷。遂西向念仏十声待刃。移時武士不加刃。中將叱云。汝何其延遲。令吾費思一刀兩斷。無余事也。武士跪白云。

不可不可。娘子金言。下人入耳動心。知因果明罪福。安可妄行斬殺。縦僕射公。
賞我厚祿。浮世百年。榮花草

12オ 原文

露。何益于理。我今奉娘子。居此深山。結一草舎。偕吾下人妻室来侍奉。休嫌訝也。中将曰。進退在汝意。遂隱是山。其妻並夫。乞食供事。中将読経念仏不忘。故其詩有深山無人通。常無勤行闕之句。至次年武士病死。庵傍葬之。唯其妻乞食資養。又明年中将年十五歳。其父僕射公獵于鶴山。登高一望。見深谷中。一簇火烟直上。問左右。此処何人所居。咸曰此山在昔至今無人棲止。遂自歩行往視。見二女人。疑為山精魔恠。

12ウ 書下し

中ニ一衣ハ汝刃ノ行ヒヲ謝ス。下ノ一衣ハ吾屍ヲ纏包シ、深谷ニ擲ゲヨ。是レ頼ム所ナリ。然ルニ吾、毎日經六卷ヲ読ム。今日、イマダ読マズ。且ク待ツコト須臾セヨ。読ミ罷テ刃ヲ行テ可ナリ。遂ニ水ヲ命シテ草葉ニ包ミテ 手ヲ淨メ經ヲ読ム。武士刃ヲ按シテ傍ニ立ツ。中将心口散乱シテ眼ニ涙止マラズ。纔カニ二、三卷（読ム）。遂ニ西ニ向テ念仏十声シテ刃ヲ待ツ。時ヲ移シテ武士刃ヲ加ヘズ。中将叱シテ云ク汝何ゾ其レ延遲シテ吾ヲシテ思ヲ費ヤサシムルヤ？一刀両斷セヨ。余事無シ。武士跪テ白シテイワク。不可ナリ。不可ナリ。娘子ノ金言下人モ耳ニ入テ、心ヲ動ス。因果ヲ知り、罪福ヲ明ラム。安ゾ妄リニ斬殺ヲ行ス可シ。縦イ、僕射公我ニ厚祿ヲ賞スルモ浮世百年榮花草露ナリ。

12オ 書下し

何ゾコノ理ニ益アラン。我今娘子ヲ奉シテ此ノ深山ニ居ス。一草舎ヲ結ビ、吾ガ下人妻室ト偕モニ来テ侍奉セン。嫌訝（ウタガウ）スルコトヲ休メタマヘ。

中将曰ク進退、汝ガ意ニ在リ。遂ニコノ山ニ隠ル。其ノ妻並ビニ夫食ヲ乞フテ供事ス。中将読経、念仏シテ怠ラズ。故ニ其ノ詩「深山ニ人ノ通スル無ク常ニ勤行闕スルコト無シ」ト云フ句アリ。次年ニ至テ武士病死ス。庵ノ傍ニ之ヲ葬ル。唯其ノ妻食ヲ乞フテ資養ス。又明年中将年十五歳ニシテ其ノ父僕射公、鶴山（ひバリヤマ）ニ獵リス。高ク登リ一望シテ深イ谷中ニ一簇ノ火煙直ニ上ルヲ見テ左右ニ問フ。此ノ処何人ノ居ル所ゾ。咸曰ク「此ノ山ニ昔ヨリ今ニ至テ人ノ棲止スル無シ。」遂ニ自ラ歩行シテ往テ視ルニ、二女人ヲ見ル。疑テ山精魔怪

12ウ 現代語訳

中の一枚の衣はあなたの刃の働きのお礼にします。下の一枚の衣は私の死体を包み、深い谷間に投げ捨ててください。これが私のお頼みすることです。しかし、私は毎日『称讃浄土経』六巻を読んでいます、今日はまだ読んでおりません。少しだけ待ってくれるか。読み終わったら刃を振りおろしてよい」。そして水を頼み、草葉にため、手を清めて読経を開始した。武士は刀を下ろし、傍に立っていた。中将姫は心と言葉が乱れて涙が止まらなかった。わずかに二、三巻だけを読んだ。そのまま西に向かい、念仏十回を唱えながら刃を待った。時間が経っても武士は刃を加えなかった。中将姫が叱って言った「汝は、どうして私を切るのを躊躇い、私に思いを費やさせるのか。一刀両断になさい。しかたがありません。」武士は跪いて言った「できません、できません。あなたの賢い言葉が、私めの耳に入り、心が動きました。因果応報を知り、罪福を分明にしました。どうして軽率に斬殺することができましょうか。

12オ 現代語訳

たとえ、豊成公が私に多額の報酬を与えても浮世百年、栄華も草の露のような（はかない）ものです。どうして命令に道理がありましょう。私はこれから姫に

お仕えし、この深い山中に居住します。一つの草庵を結び、私めと、妻も共に来てお仕えしましょう。疑うことをお止めください」中将姫が言った「私の身の上は、貴方の意のままです。」そうして、この山に身を隠した。武士の妻と夫は共に食を乞うて仕えた。中将姫は、読経したり念仏したりするのを怠らなかった。そのために其の詩に「深山に人の通うことなく、ただ常に勤行が絶えることがない」という句がある。次の年になって武士が病死した。庵の傍に埋葬した。その妻がひとりで食を乞うて養った。さらに、年が明けて、中将姫十五歳の時、父の豊成公が鶴山で狩りをした。高いところに登って一望して、深い谷の中に一筋の煙が真直ぐに上がるのを見て、傍の人に問うた。「ここは、どのような人が住んでいるところなのか。」皆が言った「この山は昔から今まで住む人はありません。」そして、公自らが歩いて行って見てみると、二人の女性に会った。山精魔怪が故意に変現して、人を惑わせようとするのかと疑って、

13ウ 原文

故意変現欲迷人。高声呵云。此处非人世所君。汝等何為。即欲発箭。二女人云。我非恠魅。乃是貧賤人。依棲此山。中将見其形。認是其父無疑。自念三年之別。逃難此山。不意今日再逢殺害。於是顯初事説元由云。我有何罪。父母棄我。雖然世界無常。吾不惧死。一任吾父。僕射聞声見面。認是女兒。亦驚惧身忽倒于地語女兒。我以不肖愚痴信讒言。一時大錯。自是以来若吾女失命。朝夕焦思。今日獵山。特為解悶。不図得再

13オ 原文

見。是我老身大幸。吾兒幸忘老身之過。同我帰洛。慰吾老年。但武士既死。其德難報。当報其妻。帰洛後。継母自慚而去。次年中将十六歳。宮中有后妃之選。中将聞之日。王宮火宅。摂家水駄。無常轉變。在所不免。不如抛離世榮出家学

道。従来当麻寺。乃國中名藍。投此空門。学無為法可也。遂至父所居為最後面。不覺下淚。父恠問其故。女慰云。我見父今年姿貌。衰于去年絶不言出家事。父亦不再詰之。日既勉。孤身出館。独

13ウ 書下し

故意変現シテ人ヲ迷セント欲ス。高イ声ニ呵シテ云。此ノ処、人世ノ居ル所ニ非ス。汝等何ヲカ為スト。即チ箭ヲ発セント欲ス。二女人云、「我恠魅ニ非ズ。乃チ是レ貧賤ノ人此ノ山ニ依棲スルナリト。中將其ノ形ヲ見テ是レ其ノ父ナルコトヲ認メテ疑イ無シ。自ラ三年ノ別、此ノ山ニ難ヲ逃レテ不意（ハカラズ）今日再ビ殺害ニ逢ウコトヲ念シテ是ニ於テ初事ヲ顕シ、元由ヲ説テ云ク「我レ何ノ罪有テカ。父母我ヲ棄ツ。然リト雖モ世界無常ナリ。吾死ヲトモナワズ。吾父ニ一任スト僕射声ヲ聞キ面ヲ見テ是レ女兒ナルコトヲ認メ亦驚惧シテ身忽チ地ニ倒レテ女兒ニ語ル。我不肖愚痴ヲ以テ讒言ヲ信ジ一時大ニ錯レリ。是ヨリ以来吾女ノ失命ヲ苦テ朝夕思フ焦セリ。今日山ニ獵リスルハ特ニ悶ヲ解カンガ為ナリ。図ラズ再ビ見ルコトヲ得。

13オ 書下し

是レ我老身ノ大幸ナリ。吾兒幸ニ老身ノ過ヲ忘レテ我ト同（トモ）ニ帰洛シテ吾ノ老年ヲ慰セヨ。但武士既ニ死ス。其ノ徳報ヒ難シ。当ニ其ノ妻ニ報スベシト。帰洛シテ後継母自ラ慚テ去ル。次年中将十六歳ナリ。宮中后妃ノ選有リ。中将之ヲ聞キ曰ク、「王宮モ火宅ナリ。摂家モ水駅ナリ。無常転変ハ、在所ニ免レズ。不如（シカズ）世榮ヲ抛離シテ出家学道セン。従来、当麻寺ハ乃チ國中ノ名藍ナリ。此ノ空門ニ投シテ無為ノ法ヲ学デ可也。遂ニ父ノ所ニ至テ最後ノ面ヲ為シ覺ヘズ涙ヲ下ス。父恠テ其ノ故ヲ問。女慰シテ云ク「我父ヲ見ルニ年ノ姿貌、去年ヨリモ衰フ。絶テ出家ノ事ヲ言ハザル。父モ亦再ビ之ヲ詰ハズ。

日ニ既ニ晩レテ孤身、館ヲ出

13ウ 現代語訳

高い声で叱り言った「ここは、世の人がいる場所ではない。お前たちは何をしているのか」と。即座に箭を射ようとした。二人の女が言った「私共は怪魅ではありません。ただ、我々は貧賤の者で、この山を棲家としているのです。」中将姫は、顔や姿を見て、その人が自分の父であると分かり、疑うことはなかった。三年の間別れて、この山に難を逃れたのに、今日また再び殺害に逢うとは思ひ、自らここで初めて事を顕らかにし、元々のわけを説いて言った「私に何の罪があって、父母は私を捨てたのでしょうか。そうはいっても、世は所詮無常です。私は死を惧れません（訓読訂正：吾死ヲ惧レズ）。ひとえに私の父にお任せします」と。豊成公はその声を聞き、顔を見て、自分の娘であることが分かり、驚き惧れて（訓読：驚惧シテ）、たちまちに地に倒れ伏して娘に語った。「私が愚かであったがために讒言を信じ、いつとき大いに誤ってしまった。あの時からずっと娘の命が失われたことを苦しんで、朝も晩も思い悩んでいた。

13オ 現代語訳

今日、山に狩りに来たのは、苦しみを解きたかったためだ。思いがけず再び会うことができた。これは老いた我が身には大きな幸いだ。我が子よ、どうかこの老人の過ちを忘れ、私と一緒に都に帰って、老いゆく年月を慰めてくれ。ただし、武士はすでに死んで、その徳には報い難い。その妻にお返しをしよう。」と。都に帰った後、継母は自ら恥じて、去っていった。次の年、中将姫は十六歳になり、宮中でお妃選びがあった。中将姫はこれを聞いて、こう言った「王宮も火宅です。摂家も水駅です。無常転変は俗世間には免れられない。ほかに道はありません、俗世の榮譽を捨て出家し道を学びます。もとより、当

麻寺は国中の名利、この空の法門に進んで無為の法を学ぶのがよい。」そして、父のところへ行行って最後の対面をすると、知らず知らずのうちに涙を落した。父は不思議に思ってその理由を問うた。娘は心配させないように言った「お父さまを見ますと、今年のお姿やお顔は（訓読：「今」脱）、去年よりも衰えました。」（姫は）もはや、出家のことを言わなかった。父もまた、再びこれについて問うことはなかった。日がすっかり暮れたあと、（姫は）ひとり家（館）を出た。

14ウ 原文

行至山。天曉求僧剃落。初名善心。後改名法如。父四処尋覓。後知出家。感而言曰。此出家之志十困繩索。亦難繫得住也。善哉吾女。為吾來生菩提自此後。父子恩義殊篤。結草庵于寺中号紫雲。法如自念。今無一事掛心頭。浮世纏縛。一時截断。出離生死。正在此時。一食長齋。精進念佛。每日書撰受經三卷。至次年六月筆竣。計千卷。依此功德。求見仏真身。七日在堂。一心祈請。斷食水穀。以死自誓。時六月十一。至十五日。日

14オ 原文

中過忽有尼。法相偉麗而至。法如問。師自何而來。荅從西方來。我写極樂莊嚴相。為君看如何。云久所願也。何時写出。令我得見。尼云須求蓮茎百駄。乃可成就。法如乃告藤公奏于朝。敕許。十八十九兩日。荷茎俱至。二十一二十二兩日。尼折茎作糸。穿寺東北一冗為井。以糸入井染之五色燦然。二十三日酉刻。忽有女甚端嚴來問曰。糸成否。尼云已成。手自付女。女接云最好。今夜即織。今暫歸去。至戌刻持織具來。尼亦嘗

14ウ 書下し

独、行シテ山ニ至。天曉ニ僧ニ剃落ヲ求ム。始メ善心ト名ズク。後改テ法如ト

名ズク。父四处ニ尋ネ覓メテ後、出家スルヲ知ル。感シテ而モ言テ曰ク、「此ノ出家ノ志十圍ノ縄索モ亦繋グトメ住スルコトヲ得難シ。善哉、吾女。吾ノ為ニ来テ菩提ヲ生ス。此ヨリ後、父子恩義特ニ篤シ。草庵ヲ寺中ニ結び紫雲ト号ス。法如自ラ念フ。今一事ノ心頭ニ掛ルコト無シ。浮世ノ纏縛ハ一時ニ截断ス。出離生死。正ニ此ノ時ニ在リ。一食長斎、精進念仏シテ毎日摂受經三卷ヲ書ス。次年六月ニ至、筆竣ム。計ルニ千卷。此ノ功德ニ依テ仏ノ真身ヲ見ルコトヲ求ム。七日堂ニ在テ一心ニ祈請シテ水穀ヲ断食スルコトヲ断チ、死ヲ以テ自誓フ。時ニ六月十一ヨリ十五日ニ至テ日中

14オ 書下し

過スニ忽チ尼有リ。法相偉麗ニシテ至ル。法如問フ。師何レ自リ来ル。荅フ。西方従リ来ル。我レ極楽莊嚴ノ相ヲ写シテ君ガ為ニ看セン。如何。云テ「久ク願フ所也。何ノ時ニ写シ出シテ我見ルコトヲ得センメン。尼云ク須ラク蓮莖百駄ヲ求ムベシ。乃チ成就ス可シ。法如乃チ藤公ニ告ゲ朝ニ奏シテ敕許ス。十八十九兩日。荷莖俱ニ至ル。二十一二十二兩日。

尼莖折テ糸ト作ス。寺ノ東北ニ一穴ヲ穿テ井ト為ス。糸以テ井ニ入テ之ヲ染ム。五色ハ燦然タリ。二十三日酉刻ニ忽チ女甚ダ端嚴ナル有テ来リ。問曰ク糸成ルヤ否ヤ。尼云ク已ニ成ルト。手カラ自ラ女ニ付ス。女接シテ云ク最モ好シ。今夜即チ織ラン。今暫ク歸リ去ラント。戌刻ニ至テ織具ヲ持シ来ル。尼亦

14ウ 現代語訳

(姫は)ただ一人、山へと向かい、至った。明け方、僧に剃落を求めた。最初は善心と称したが、後でこれを改め法如と称した。父はあちらこちらに娘の行方を尋ね求めた後、娘が出家したことを知った。感動して娘に言った「お前の出家の志は、十圍の縄をもってしても繋ぎとめ、引きとどめることは出来ないも

のだ。素晴らしいぞ、我が娘よ。私のために来て、菩提を起してほしい。」これより後、親子のいつくしみは殊に篤くなった。草庵を寺の境内に結び、紫雲と号した。法如は自ら考えた。「今、ひとつの心配ごともない。浮世の束縛などは一気に断つことができた。出離生死〔涅槃の境地に入ること〕の時は正に今にある」。一食長斎、精進念佛し、毎日、『称讃浄土仏摂受経』三巻を写経した。次の年の六月になって、筆を置いた。一千巻を数えた。この功德により、仏の真身を見ることを願った。七日間、堂に籠り、一心に祈請して水も食物も断った。自らの死をもって仏に誓いを立てた。それは時に、六月十一日からのことだったが十五日になって、昼日中に突然一人の尼が現れた。

14才 現代語訳

ありのままの姿は威厳があり麗しく、(法如に)近づいた。法如は問うた。「師はどこから来られたのでしょうか」。尼は答えた「西方より来ました。私が極楽莊嚴の有り様を写して、あなたのために見せましょう。いかがですか。」法如は言った「長らく願ったことです。いつ、写しだして私に見させて下さるのでしょうか。」尼は言った「蓮の茎百駄を求めなければなりません。そうすれば叶うでしょう」と。法如はすぐに豊成公に言われたことを知らせ、朝廷に奏上して、勅許が下りた。十八、十九日両日は蓮の茎を集めた。二十一、二十二日両日には、尼が茎を折って糸にした。お寺の東北に穴を掘って、井戸を作った。糸を井戸に入れて染めた。五色に染めた糸は鮮やかに光り輝いた。二十三日酉の刻〔午後六時から八時まで：必要？以下同じ〕、突然、非常に厳かで美しい女がやって来て、「どうですか。糸はできましたか。」と問うた。尼は「すでに出来ております」と言った。手ずから女に渡した。女は触って、言った「最高に素晴らしい。今夜、早速織りましょう。今しばらくは戻っていきましょう。」と。(女は)戌の刻〔午後八時から十時まで〕になると機(はた)を持ってやって来た。尼

はまた、熱心に働いて、機を共に織った。

15ウ 原文

為共事。子丑寅三時中。用油三升。洒藁三把。法如燃之。機杼之声清微。四更織成。天曉女出庭前。斫一竹為軸。竹乃一夜之中所生。長一丈五尺無節。卷而為軸。持與尼徑去不現。尼掛之中堂。指図中依正等境示法如。復礼三拝唱偈曰。往昔迦葉說法所。今來法起作仏事。感君懇志我來此。一至是場永離苦。既而尼告歸。此時法如聳然私念。適化女不言而去。今此尼亦或復然。急伸手扳執尼衣袖白言。善哉知識是何人

15オ 原文

哉。如是滿我願。又適前歸之女是誰。尼云。我是西方極樂世界教主阿弥陀如來。適所還女是我左脇觀世音也。伸手三摩法如頂云。再遇不遠却後十三年。三月十四日必迎汝即從座起至二上岳隱矣。至十三年。法如年二十九。當寶龜六年。三月十四日。如所期而寂。

15ウ 書下し

當為シテ事ヲ共ニス。子丑寅ノ三時中、油三升ヲ用テ藁三把ニ洒（マ）キ法如之ヲ燃ス。機杼ノ声清微ナリ。四更ニ織リ成セリ。天曉ニ女庭前ニ出テ一竹ヲ斫テ軸ト為ス。竹乃チ一夜ノ中ニ生スル所ナリ。長ケ（タケ）一丈五尺、節無シ。卷キテ軸ト為シ、尼ニ与、徑（タダチ）ニ去テ現レズ。尼之ヲ中堂ニ掛ケテ図中ノ依正等ノ境ヲ指シテ法如ニ示ス。復タ礼スルコト三拝シテ偈ヲ唱ヘテ曰ク往昔迦葉說法ノ所、今來、法起リ、仏事ヲ作ス。君ガ懇志ニ感シテ我此ニ來ル。一タビ是ノ場ニ至レバ永ク苦ヲ離ルト。既ニ尼歸ルコトヲ告グ。此時法如聳然トシテ私（ヒソカニ）念フ。適キニ化女言ワズ去ル。今此尼モ亦或ハ復

タ然ラント。急ニ手ヲ伸ヘテ尼ノ衣袖ヲ板執シテ白シテ言「善ヒカナ。知識是レ何ノ人ゾヤ。

15オ 書下し

是ノ如ク我願ヲ満ツ。適サキニ前女ハ是レ誰ゾ。尼云ク我ハ是レ西方極楽世界教主阿弥陀如来ナリ。適ニ還ル所ノ女ハ是レ我ガ左脇観世音ナリ。手ヲ伸ヘテ三ヒ法如ノ頂ニ摩シテ云ク再遇遠カラズ。却後十三年。三月十四日必ズ汝ヲ迎ヘント。即チ座ヨリ起テ二上岳ニ至テ隠ル。十三年ニ至テ法如年二十九ニシテ宝亀六年ニ当ル。三月十四日。期スル所ノ如シテ寂ス。

15ウ 現代語訳

子丑寅の三刻の間、油三升を藁三把に蒔き、法如がそれを燃やした。機音は清らかでかすかだった。四更〔午前二時ごろ〕に織りあがった。夜明けに法如は庭前に出て一本の竹を切り、軸を作った。その竹は一夜の間に生じたもので、長さは一丈五尺で、節がなかった。（織物を）巻いて軸とし、尼に与えて、すぐに立ち去った（径ニ去テ現レズ）。尼はこれを中堂に掛けて、図の中の依正等の世界を指し示して、法如に教えた。さらに三回礼拝して偈を唱えながら言った「いしにえの迦葉の説法から、今に至ってようやく、仏法が興り仏事が成りました。あなたの篤い信心に感応して、私はここに来しました。ひとたび、この境地に至ったならば、永遠に苦しみから離れられます」と。もはや尼は帰ることを告げた。この時、法如はおそれつつしみながら心ひそかに思った。化女は何も告げずに去った。今、この尼も又、或いはそうなのではないか。（法如は）急いで手を伸ばし、尼の衣の袖に取りすがって（板執？）言った「ああ。尼僧さま〔善知識〕は一体、どのようなお方なのですか、このように私の願いを満たしてくださるのは。

15オ 現代語訳

また先ほどの女性は、あれはどなたですか。」尼は答えた「私は西方極楽世界の教主である阿弥陀如来です。少し前に帰った女は私の左脇の観世音菩薩です」。手を伸ばして、三度、法如の頭のいただきを撫でて言った。「再会の日は遠くありません。十三年後の三月十四日に必ずあなたを迎えましょう」と。すぐに座から立って、二上岳まで行き、姿を消した。十三年経って、法如二十九歳、宝亀六年のことである。三月十四日に、約束のとおりに入寂した。

16ウ 原文

当麻図記刊行。流通于震且矣。原夫支那日本。相去非遥也。若百億日月。百億須弥。百億四洲。視今之南瞻則一小環耳。支那日本。同在環中。若無量世界。人之信心念仏。非不多也。仏眼非不見也。独於日本粟散之國当麻荒落之地。仏的的而来。用五濁凡世之蓮茎。織成極樂西方之聖境。此神異事。従有仏法已来。所未有也。凡事皆従横逆中。転為厚幸之事。如韋提希因逆子。中将女因瞿母。成就

16オ 原文

此一段大因縁。仏雖為酬中将法如一人之願。其实作両国衆生。万万世之普度慈航也。此図示世。将及千年。支那人尚未見未聞也。瑩每念。安得支那衆生。見此聖瑞。懷此于心中。已五十年矣。今已開第八秩幸得見東明悅公。成此勝事。喜躍何如。則余往歲讃詞有。安得拈当麻一縷藕糸。培植于支那一國。普使衆生開青蓮眼。実東明以眼施人語果応也。惜雲棲大師。未及見此。乃図一幅。以寄進

16ウ 書下し

当麻図記刊行シテ震且ニ流通ス。原（タズネ）ルニ夫レ支那日本相ヒ去ルコト

遙カナルニ非ズ。百億日月百億須弥百億ノ四洲ノ若ク今ノ南瞻ヲ視ルニ則一小環ノミ。支那日本同ジク環中ニ在リ。若シ無量世界、人ノ信心念仏スル多カラザルニ非ズヤ。仏眼見ザルニ非ズヤ。独リ日本粟散之國当麻荒落ノ地ニ於イテ仏的トシテ来テ五濁凡世ノ蓮茎ヲ用ヒ極樂西方ノ聖境ヲ織リ成ス。此ノ神異ノ事有テヨリ仏法已ニ来。未ダ有ザル所ナリ。凡ソ事皆横逆ノ中ニ従リ転ジテ厚幸ノ事ヲ為ス。韋提希ノ如キハ逆子ニ因リ中將女ハ瞿母ニ因テ此一段大因縁ヲ成就ス。

16オ 書下し

仏、中將法如一人ノ願ニ酬ヲ為スト雖モ其ノ実ハ兩國ノ衆生万万世ノ普度慈航ト作ルナリ。此ノ図世ニ示シテ將ニ千年ニ及バントス。支那人尚未ダ見ス未ダ聞カザルナリ。瑩毎（ツね）ニ念フ。安ソ支那衆生此聖瑞ヲ見ルコトヲ得ン。此ヲ心中ニ懷ク。已ニ五十年。今已ニ第八秩ヲ開テ幸ニ東明悦公ニ見ルコトヲ得。此ノ勝事ヲ成ス。喜躍何ニカ如カン。則チ余往歳讃詞有リ。安ゾ当麻一縷藕糸ヲ拈シテ支那一國ニ培植シテ普ク衆生ヲシテ青蓮ノ眼ヲ開カセシムルコトヲ得ント。実ニ東明眼ヲ以テ人ニ施スナリ。語果シテ応ス。惜（ヲシム）ラクハ雲棲大師未ダ此ヲ見ルニ及バザルコトヲ。乃チ一幅ヲ図シテ以テ大師塔堂ニ寄進ス。

16ウ 現代語訳

当麻図記が刊行され、中国に流通した。その原因を求めるに、支那と日本の相隔たることは、そう遙かではないことがある。百億の歲月、百億須弥、百億の世界の如きから、今の南瞻を見ればただ小さな環があるだけだ。支那と日本は同じ環の中にある。仮に世界が無限であるなら、人々の信心し念仏することは多く（充分で）ないのではないか。仏の眼を見て（悟って）いないのではない

か。唯一、日本という粟粒を散らしたような小さな国の当麻という荒落な地に、仏が紛れもなく来臨して、五濁凡世の蓮の茎を用い、西方極楽の聖境を織り成した。このような神異の事は、仏法が出現して以来、未だかつてなかったような事である。おおよそ、事は皆、道理に逆らうような中から、状態を転じて、とても幸いなことが生じる。韋提希などは邪な息子により、中将姫は愚かな母によって、一つの大因縁を成就できた。

16オ 現代語訳

仏は、中将法如一人の願いに酬いたとはいっても、実のところは、支那、日本両国の衆生の永遠の普度慈航（普く度する慈しみの航）を図ったのである。この図は世間に出現して、すでに千年になろうとしている。支那の人々はいまだ見てもいないし聞いたこともない。独湛性瑩は常に思っていた。「どのようにして支那の衆生は、この聖瑞を見ることができようか。」これを心の中に懐いて、すでに五十年である。今は、さらに第八の秩を開いて（八十年を越えて）、幸いに東明の悦公にまみゆることができた。このような素晴らしいことを成す喜びは何にも代えられない。私は以前、讃詞をなした。どのようにして、当麻の一縷の藕糸を摘み、支那一国に植え育てて、普く衆生に青蓮（仏、つまり悟り）の眼開かせられようか。それで、東明が眼（で見る図）によって人に施すのに対し、言葉を尽くして応ずるのである。惜しいことは、雲棲株宏がいまだこの図を見ることができないことである。そこで一幅の図を書き、大師の塔堂に寄進するのである。

17ウ 原文

大師塔堂焉。此図成後。当麻之地。幅員周六十里。至今蓮之茎皆無糸。別開之池。蓮糸仍有。此図再裱之時。掃下久年蓮糸之粉。将数外遂製之為丸。病人乞

寛頂戴。病多痊癒。臨終散乱之人。頭戴于捧。多晏然而終。

辛巳年仏成道日（一七〇一）

17ウ 書下し

大師塔堂焉。

此ノ図成テ後当麻ノ地ニ幅員周六十里。今ニ至テ蓮ノ茎皆糸無シ。別開ノ池ハ蓮糸仍チ有リ。此ノ図再裱ノ時、久年蓮糸ノ粉ヲ掃下シ、将ニ数升ナラントス遂ニ之ヲ製シ丸ト為ス。病人乞寛シ頂戴スレバ病ノ多クハ痊癒ス。臨終散乱ノ人ハ頭ニ戴キ手ニ捧レバ多ク晏然シテ終ル。

辛巳年仏成道日（一七〇一）

17ウ 現代語訳

この図が成った後、当麻の地において幅員周六十里は、今に至るまで蓮の茎は皆、糸がない。別に開いた池では、蓮糸がある。この図を再裱する時、長年溜まった蓮糸の粉を掃き下ろすと、その量は数升になろうとした。そこで、これを調製して丸薬にした。病人は求めて頂くと、病気の多くは治癒する。臨終でとり乱す人は頭に戴き、手に捧げると、多くは安らかに最期を遂げる。

跋 17オ 原文

将姫事績所録。有三卷。不知何人所撰記以此土。語不得伝他方。黄檗独湛禅師異其事实著写文章。遂刻于彼土以広其伝事物外之友実祐師適得一本謀於同志翻刻之又明広聖伝夫一念精誠必有感応。将姫西方聖図事多靈驗精誠所到也。千載之下有禅師姫伝于彼土事績益著鳴

18ウ 原文

乎。一念精誠億劫不滅此記流伝不朽亦可以推知也。実祐師此氣惟其功德比於恒汝也。

藤益根跋

華順山

出経堂印

跋 17オ 書下し

将姫ノ事績所録ノ三卷有り。何人ノ撰記スル所ナルカヲ知ラズ。此ノ土ノ語ヲ以テ示シ伝ヘ得タリ。他方黄檗ノ独湛禪師、其ノ事実ヲ異（アヤシ）ミ、為チ文章ヲ著ス。遂ニ彼ノ土ニ刻シ以テ其ノ伝ヲ広ム。物外ノ友、実祐師、適々一本ヲ得テ、同志ニ謀リテ之ヲ翻刻シ又以テ聖伝ヲ広ム。夫レ一念ノ精誠、必ス感應有り。将姫ノ西方聖図ノ事、多ク靈異精誠ノ至ス所ナリ。千載ノ下、禪師有りテ、始メテ彼ノ土ニ事績ヲ伝フ。益著ス、鳴、

18ウ 書下し

乎一念ノ精誠億劫ニ不滅ナリ。此ノ記ノ不朽ノ志ヲ流伝スルコトヲ以テ推シテ知ルベキナリ。

実祐師ハ此ノ氣其ノ功德ヲ惟ルニ恒沙ニ比ブナリ。

藤益根跋

華順山

出経堂印

跋 17オ 現代語訳

中将姫の事蹟を録したものは、三卷ある。誰が記したのかは知られていない。

この土（日本）の言葉で伝えることができた。一方、黄檗宗の独湛禅師はその事実を不思議に思ったため、文章を著した。遂にその国（中国）で刻して、その伝説を広めた。出家の友、実祐禅師はたまたまこの本の一冊を得て、仲間を謀って、この本を翻刻して、この聖なる伝説を広めてきた。少しでもの真心のある人は、必ず感応する。中将姫の西方の聖なる図は、不思議で真心を込めたことを致すところである。その（中将姫）の事蹟の千年後の時点で、独湛という禅師があり、初めてその土の中国でこの出来事を伝えた。さらに著す。お、

18ウ 現代語訳

少しでもの真心は億劫経ても不滅である。この記録の不朽の志を伝えたことを推して知るべきであると。実祐禅師の気力、功德は恒沙に比較するに及ぶのである。

藤益根跋

華順山

出経堂印

おわりに

本論は奇妙な資料である『翻刻当麻圖記』における簡単な背景とその中身の紹介にとどまる。独湛の縁起説の特徴、中将姫伝説の他のバージョンとの共通点・相違点、そして独湛の縁起説、悦峰の図が中国での足跡などについて、より緻密な分析、検討は後の論文を待たなければならない。しかし、ここで、確定できることは、黄檗宗の禅傑である「念仏」独湛が浄土宗の当麻曼荼羅を拝観し、感動したため、文学的・美術的な媒体にその気持ちを託し、『翻刻当麻圖記』のような作品ができ、日中仏教交流史における見逃せない一齣となったと言っても過言ではなからう。